

<リレー企画>ラグビーを愛する医師列伝

医療グループ運営にラグビーの精神



ラグビーW杯2019記念・ドリームチーム | 医師
2019年7月19日



会員寄稿のメンバーズメディアでは、ラグビーワールドカップ2019日本大会の開催に伴い、ラグビー経験者の先生がたによるリレー企画をお届けします！

執筆陣はいずれも現在の医療界を牽引する方々で、この企画のために結成されたドリームチーム。「え、あの先生もラガーマンだったの？」と驚くかもしれません。

第8回の執筆を務めるのは、戸田中央医科グループ 副会長で、医療法人横浜柏堤会 理事長である横川秀男先生です。

横川先生は、その当時、活動停止寸前だった麻布高校ラグビー部に1年生で入部。以来、ラグビーに深く関わる人生を歩まれています。**戸田中央医科グループの運営にラグビーの精神を生かしていらっしゃるだけでなく、医療法人で初となる女子ラグビーチームを創設されたことも功績の一つです。**

「男のスポーツ」はもう古いという横川先生。スポーツ界でも医療界でも、より女性が活躍する未来のため、環境づくりが必要だと語ります。

ラグビーを愛する医師たちが熱く語る本企画、ラグビーを知らない方にもお楽しみいただけれる内容ですので、どうぞご覧ください。

執筆者プロフィール 横川秀男先生



1957年2月19日生まれ、東京都出身
麻布高等学校・昭和大学医学部卒業
・戸田中央医科グループ 副会長・医療法人横浜柏堤会 理事長
・YOKAHAMA TKM 代表・神奈川県体育協会 理事
・昭和大学ラグビー部OB会 会長、神奈川県ラグビー協会評議員

ラグビー歴

麻布高校1年生でラグビーを始め、昭和大学医学部に進学、ラグビー部に入部。大学でも6年間プレーをしました。その後、昭和大学ラグビー部の監督を6年間務め、現在はOB会長に。また、医療法人で初となる女子ラグビーチームを創設。女子ラグビーチームYOKOHAMA TKM 代表も務めています。

ポジションの変遷 高校時代は左ロック、4番 大学からはNo.8です。

一番印象に残っているゲーム

大学4年生の夏合宿。体もぼろぼろになりながら、慶應大学体育会ラグビー部と、さらには筑波大学体育会ラグビー部と連戦した思い出です。

好きな選手・注目選手 リッチャー・マコウ、リーチマイケル、浜本剛志、林敏之、瀬下和夫

好きなチーム YOKOHAMA TKM、日本代表、オールブラックス

皆様、はじまして、戸田中央医科グループの横川秀男です。高校、大学時代ラグビーに夢中になりました。現在はラグビー精神で医療グループの運営に努めています。というのも、病院再建、新規開設などの仕事は、ラグビーのチームを強化することに似ているのです。

ラグビーワールドカップでは皆さんと一緒に応援し、ラグビーファンがさらに増え、ラグビー精神で日本の医療をさらに良くするお手伝いができればうれしいと思います。

活動停止寸前のラグビー部を救った高校時代から、現在に至るまで

麻布中学3年生の冬にラグビーの魅力にひかれ、高校1年の春、部員が少なくて活動を継続できなくなりそうなラグビー部に、サッカー部、柔道部、バスケットボール部、陸上部、無所属の友人を数多く誘い、一緒に入部しました。

その友人たちも皆ラグビーの虜になり、卒業後は早稲田大学、慶應大学、東京工業大学、横浜国立大学などで熱中しました。私は昭和大学医学部に進学し、勉学よりもラグビー優先の学生生活をおくり、6年間プレーしました。

ポジションはNo.8で、グランドを走り周り、激しいコンタクトプレーが好きでした。卒業後は昭和大学の監督を6年間、現在はOB会長を務めています。

忘れられない慶應大との練習試合一 40年経っても交友関係は続く

大学4年の時の山中湖での夏合宿では忘れられない思い出があります。上田昭夫元日本代表・元慶應大学監督のご尊父で、昭和大学歯学部学生部部長を務めておられた上田喜一教授のご紹介がきっかけとなり、慶應大学体育会ラグビー部と練習試合ができたのです。

慶應大学は低学年の選手を中心としたチームだったと思いますが、私たちが懸命にディフェンスしても、鋭いライン攻撃に次々に抜かれ、フォワードのラインアウトプレーでは、ロングスローと思っ

ていると、前から4番目にいる選手が見事なジャンプでキャッチしてしまうという…そんなレベルの高さに驚きました。

しかし昭和のフルバックがインゴールでタックルをきめて慶應のトライを阻止したプレーや、ノーサイド寸前にペナルティーゴールで唯一の得点をあげると、グラウンドを取り囲んで観戦していた上級生、レギュラー陣から大きな拍手がわきました。一生懸命に最後まであきらめないプレーに対する、分け隔てなく温かい、眞のスポーツマンシップ、ラグビー精神を強く感じ、忘れる事のできない試合となったのでした。

それから40年がたちましたが、当時の慶應大学キャプテン・トップの山城泰介さんや、No.8で元日本代表の浜本剛志さんとは、今でも友人として楽しくお付き合いさせていただいています。



1979年10月 昭和大学対日本医科大学戦(日本医科大学グラウンド)

戸田中央医科グループの運営にもラグビーの精神が生きている

学生時代は ラグビーのことしか頭にありませんでしたが、卒業後は昭和大学外科学教室で約5年間、外科学全般を修練したのち、胸部心臓血管外科分野に進みました。

手術室、ICU、病棟、リハビリテーションでも、患者さんを助けるという目標に向かって、外科医師、麻酔科医師、循環器科医師、看護師、ME、放射線科技師、リハビリテーションスタッフ、事務職をはじめ、すべての職種が気持ちを一つに支えあい、お互いを尊重してカバーしあいながらゴールを目指すという姿勢は、ラグビー精神そのものだと思います。

1993年から戸田中央医科グループで病院の新規開設や再建、介護事業や看護学校運営、健康支援活動、災害時医療支援活動などの仕事をしていますが、やはり各分野の職員同士が患者様を中心にお互いを尊重して支えあい、さらには患者様、利用者様、ご家族、地域の皆様にもチームの一員になっていただくことで、ONE FOR ALL, ALL FOR ONEのラグビー精神による運営を実現しています。

学生時代は考えもしませんでしたが、ともにプレーしたメンバーをはじめ、対戦してくれた相手チームのメンバーや、ラグビーを通じて知り合ったトップレベルのレジェンドの方々など多くの友人の

支えと、ラグビーから学んだ支えあいと自己犠牲の精神など、貴重な経験のおかげで仕事をはじめ人生が成り立っています。

「男のスポーツ」はもう古い!医療法人で初となる女子ラグビーチームを創設

私たちのグループでは、2011年8月8日に創部したYOKOHAMA TKM(戸塚共立メディカル女子ラグビークラブ)という、女子ラグビーチームを運営しています。現在は15人制の日本代表にメンバーから数名選ばれており、チームは7人制の国内最高峰の大会に参戦しています。



YOKOHAMA TKMのメンバー(日体大健志台グラウンド)

また、ラグビーワールドカップ日本大会の広報活動として、神奈川県および横浜市のラグビー協会や横浜市が主催するイベントやトークショー、ラグビ一体験教室、そして釜石市が東日本大震災の復興支援活動として主催するイベント等にも積極的に参加しています。

現在、世界のラグビープレーヤーの30%は女子プレーヤーで、世界のラグビーを統括する団体であるワールドラグビーは、これから世界戦略として女子ラグビーの普及、支援に重点をおくとのことです。

昔は「男のスポーツ・ラグビー」と呼ばれていましたが、今はそのような呼び名は存在しません。様々な分野において女性の活躍が進んでいますが、医療界でもこれからますます進むことでしょう。素晴らしいことで、私たち医療界も女性が活躍しやすい環境を整えることに一層の努力をしなければいけないと思います。

來たるビッグイベントでは、困難を乗り越える姿勢を学び取れるはず

ラグビーワールドカップは世界で3番目に大きなスポーツイベントで、今回がアジアではじめての開催です。日本代表の素晴らしい試合や、各国の迫力あふれるダイナミックなプレーを見ることによって、技術のみではなく、体をはって支えあう自己犠牲の精神、そして戦いが終われば敵味方

なくたたえあうノーサイドの精神を多くの皆さんに見て感じていただき、ラグビーの魅力を知っていただければ嬉しいです。

この姿勢が、皆で力を合わせて様々な困難を乗り越え、前進するための指針になればと思います。

この大きなイベント、ラグビーワールドカップを皆で楽しみ、盛り上げていきたいと思います。そして一生に一度ではなく、日本代表の頑張りと皆様の応援で、何十年か後にもまた日本にワールドカップが来ることを願っています。

私はラグビー精神で皆様とともにこれからも医療界に、社会に貢献してまいります。



2015年ラグビーワールドカップイングランド大会直後のコーチングセッションにて

元日本代表ヘッドコーチのエディージョーンズ氏と共に



ラグビーW杯2019記念・ドリームチーム
医師

ラグビー経験者の医師によるリレー企画です。一度きりの人生において、同じ職業を選択し、同じスポーツを愛するという共通点を持つ仲間たちが、ラグビーの魅力や医師人生に与えた影響を熱く語ります！